

万葉図書・情報室だより35号

風土記の魅力

今からちょうど一三〇〇年前、和銅六年（七一三年）五月に、いわゆる「風土記」の編纂が命じられました。「続日本紀」によると、諸国の郡・郷ごとに好い字をつけて、そこで採れる有用な動物・植物・鉱物や、農地の状態、山川原野の名前とその由来、古老が代々伝えるかわった話などについて、調査して報告せよという官命が下ったとあります。

実は、この命令の中に「風土記」という書名は登場しません。現在私たちが『〇〇国風土記』と呼ぶ書物は、もともとは、おそらく解状（げじょう）または解文（げぶん）という報告書の形で献上されたものだったと考えられています。「風土記」とは、各地の風土について記した書という程度の意味で、古代に書かれたものではない文献にも「風土記」と名付けられたものが多数あります。そこで、そうした後世の文献と区別するために、奈良時

代に編集され中央に献上された文書を、とくに「古風土記」と呼ぶ場合もあります。

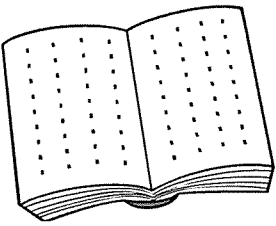
現存する「古風土記」は、播磨国・常陸国・出雲国・豊後国・肥前国の五カ国と、別の書物に引用されたことで文章の一部が残った例です。引用文については、「逸文」と呼ばれています。「万葉集」「懷風藻」や『古事記』『日本書紀』などとともに、古代文化を知ることができる貴重な文献です。

「風土記」編纂の命令がなされた当時、前年には『古事記』が献上され、『日本書紀』の編集作業も進んでいた時期にあたります。そうした国としての歴史をつくる作業と同時に、国内の地理についても把握しようとしたのはなぜだったのでしょうか。歴史も地理も、中央集権国家の確立には欠かせないものだったからだといわれています。大和朝廷は中国文化を手本として、中央集権化を押し進めようとしていたと考えられます。地名に好い字をつけるのは、中国の地名が漢字二字であったことにならって、地名を良い意

味を持つ漢字二文字で書き表すようにしたこととされていますし、各地の農地の評価や有用な産物を把握しておくことも、国家運営の上できわめて重要なことでした。

ことに興味深いのは、山・川・原・野の名前とその由来、古老が伝える伝承などが詳しく書かれている点です。一般に「風土記」といえば、そうした地名由来譚が集められた書物というイメージが強いかもしれませんが、たとえば、昔応神天皇がこの岡に登って国見をなさったから「御立岡（みたちおか）」という、国引きを終えて「おう字（おう）郡」というなど、不思議な地名の由来説明が数多くあります。そうした部分を読むだけでも、古代の人々の想像力に触れることができ、楽しくなります。

また、『古事記』や『日本書紀』にあるヤマタノオロチ退治の話が、本家本元ともいえる『出雲国風土記』には無く、逆に風土記にはある国引き神話が記紀には無い、などの伝承の違いもみられ、興味は尽きません。



一三〇〇年目の今年、「風土記」を片手にゆかりの地をめぐるつもりでも面白いかもしれませんね。

（万葉古代学係 井上さやか）

〇新着図書案内〇

☆懷風藻全注釈

（辰巳正明／笠間書院）

☆中西進著作集35・36

（中西進／四季社）

☆はじめて楽しむ万葉集

（上野誠／角川学芸出版）

☆平城宮兵部省跡

（奈良文化財研究所）

☆飛鳥・白鳳の在銘金銅仏

（奈良文化財研究所）

☆春の苑紅にほふ はじめての越中万葉

（高岡市万葉歴史館）

利用案内

開館時間—午前十時～午後五時半

休館日—月曜日（祝日の場合は翌

日）・年末年始・展示替日

図書室のご利用は無料です

閲覧でのご利用になります。

コピーサービス 白 黒一枚 10円

カラー一枚 50円

奈良県立万葉文化館万葉図書・情報室

奈良県高市郡明日香村飛鳥一〇

0744-54-1850（代）